



TITLE:

# シュモラーの國民經濟學方法論

AUTHOR(S):

白杉, 庄一郎

---

CITATION:

白杉, 庄一郎. シュモラーの國民經濟學方法論. 經濟論叢 1938, 46(1): 78-94

ISSUE DATE:

1938-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131045>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號      第 四 十 六 卷

昭和十三年一月一日發行

## 新年特別號

資本主義と戦争	文學博士 高田保馬
絶對國家	經濟學博士 作田莊一
農地自治管理論	經濟學博士 八木芳之助
ナチス主義と經濟的自己責任の原則	經濟學士 中川與之助
工場内住居施設に就いて	經濟學士 大塚一朗
シュモラーの國民經濟學方法論	經濟學士 白杉庄一郎
重農派租稅論の基礎問題	經濟學士 島 恭 彦
國際收支均衡の理論	經濟學士 松 井 清
近代地代理論について	經濟學士 山岡亮一
投資乘數の理論	經濟學士 飯田藤次
國際收支策としての輸入統制	經濟學博士 谷口吉彦
共同體の人間學的考察	經濟學博士 石川興二
新着外國經濟雜誌主要論題	

(禁 轉 載)

# シュモラーの國民經濟學方法論

白 杉 庄 一 郎

グスタフ・シュモラー（一八三八—一九一七年）が、國民經濟學方法論を初めて最も包括的に展開したのは、コンラツトの『國家學辭典』第一版第六卷『國民經濟・國民經濟學並にその方法』の項への寄稿（一八九三年）に於てである。これは後『社會政策並に國民經濟學の若干の基礎問題について』（一八九八年）に收められた。でこゝでは『基礎問題』に於ける國民經濟學方法論を中心とし、その前後の諸論文・『一般國民經濟學綱要』第一部（一九〇〇年）及び同『辭典』第三版第八卷に於ける同項への増補（一九一一年）——これは彼が我々に残した最後の最も完成せる國民經濟學方法論である——等に於けるそれを参照して、彼の所説を概説する。

先ずシュモラーの國民經濟概念の規定をみよう。彼によれば、經濟とは、一人又は多數の共同生活をなす個人が生計のための勞働・物質的外界への働きかけ・交換によつて、第一に且つ主として自分自身の間で、次いで第三者に對して、創出した所の施設並に關係の總體である。<sup>1)</sup>

（註）トライチュケに對する公開狀にシュモラーは次の如く書いてゐる。「經濟生活は純自然的なものとして始まる。……常に自然的欲望の充足・高級な欲望のための自然的手段が問題である。然し何處に於ても決して純自然的技術的なものに止まつてはゐない。蓋し生れながらの倫理的感情・美的欲望や知性があらゆる自然的行爲を捉へ且つ變へるからである」と。そしてこ

1) „Die Volkswirtschaft, die Volkswirtschaftslehre und ihre Methode.“ 1893. Über einige Grundfragen der Socialpolitik und der Volkswirtschaftslehre. Leipzig 1898. S. 215-16

から經濟生活の倫理性を導いて来る。又『綱要』では經濟活動 (das Wirtschaften) と經濟 (die Wirtschaft) とを區別してゐる。<sup>2)</sup>

然し右の如き意味に於ける經濟の概念は國民經濟といふ概念よりも古い。國民經濟なるものは近世國民國家と共にそしてその内に發生したものである。而して、「國民とは言語と血統・慣習と道德・多くはまた法律と教會・歴史と國民組織によつて統一された多數の個人であつて、それらの個人は自己の内に他の諸國民の成員とよりも千種万様に緊密な紐帶によつて結合されてゐる。」この紐帶は以前には家族・ゲマインデ・種族等の成員間のみ存在したのであるが、今日では國民なるもの、成員間にも發生し、而も極めて多種多様となつて、統一的な所謂國民精神なるものが生成するに至つた。國民精神は統一的な慣習や行爲に自己を表現し、萬人の行爲を支配する。勿論社會の心的生活の統一的側面は必ずしも國民生活に限らない。それと並んでより小範圍のものがある。然しそれらは國民の内へ包攝されるものであり、國民こそが差當り標準的なものである。かくしてシュモラーは國民を精神的統一體と解し、そこに國民經濟の心的統一面をみる。加之、一國の個別經濟は全て分業と交換によつて結合されてゐる。<sup>(註)</sup>更にこの自由なる結合の外に統一的な經濟法及び經濟的國家施設による結合がある。これらはまた個別經濟をして國民經濟の從屬的分枝たらしめる。そこで彼は國民經濟を「一國家の内に存在する一部分は相並び・一部分は相重なり且つ絡みあつてゐる個別並に團體經濟——國家財政をも含めて——の總體」と規定する。この總體は國民の經濟的社會的制度並に施設の統一的體系と解され、この體系はその部分が獨立してゐるにも拘らず一の統一的實在的全體とみられる。即ちそれは統一的な心的並に物的原因によつて支配され、その全部分は緊密な相互作用の關係にあり、その中心機關は總ての部分に對して立證し得べき作用を及ぼす。各國民經濟

- 2) Über einige Grundfragen des Rechts und der Volkswirtschaft. Ein offenes Sendschreiben an Herrn Professor Dr. Heinrich von Treitschke. 1874-75. a. a. O. S. 46 ff.
- 3) Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. Erster Teil. Dreizehntes und Vierzehntes Tausend. 1920. S. 3.

の總體現象は部分の絶えざる變遷にも拘らず我々の表象にとつては本質的に不變であり、我々は同一國民經濟の一切の變化を同一本質の發展と概念し得る。<sup>4)</sup> 又彼は、國民經濟といふ概念を單なる集合概念・個別經濟の總和に對する略語に過ぎないと考へ、國民經濟に統一的中央集權的統制はなく、經濟活動をなすのは常に個人だと考へるのは、誤りであるとする。<sup>5)</sup>

(註)分業と交換によつて今日既に國家を超えた一の世界經濟が形成されてゐる。然しその結合は國內に於けるものよりも遙かに弱い。今日なほ支配的なのは國民經濟である。數世紀後に世界經濟なるものが存在するであらうかどうかは未定である。その場合には恐らく用語も變るであらう。世界經濟について『基礎問題』にはかう述べてゐるが、『綱要』には次の如く書いてゐる。<sup>7)</sup> 我々は全世界の經濟生活の總體を地理的に相並び歴史的に相續く國民經濟の總和と考へ、今日互に接觸し依存し合つてゐる國民經濟の總和を世界經濟と名づけると。そして各國民經濟が自己を完成し自己の利益を擁護すると同時に國民經濟相互間の世界經濟的接觸の高まらんことを希望してゐる。

右の如くシユモラーは國民經濟を一の全體として國民生活から抽出した後、之と他の國民生活域との聯關に言及してゐる。國民經濟は最近二世紀間に相對的獨立の體系として發展した。その故にそれは一の獨立の體系として他の體系から分離して概念されるに至つた。然しこの分離は現實に於てよりはむしろ思想に於てなされるものであることを忘れてはならぬ。國民經濟に働く諸力は、他の文化目的を追求し國家・教會を形成し・道德・慣習・法律の擔當者として現はれるものと同一のものである。「國民經濟は常に社會生活を構成する部分内容である。國家と國家行政は共に常に國民經濟の制度である。近代的國家施設なくして國民經濟なるものは考へ得られない。」殊に最近經濟政策其他の經濟施設によつて國民經濟の廣範な統一的統制が行はれつゝあることをも看過してはならない。<sup>8)</sup>——又國民經濟を有機體と呼ぶことの可否に關聯して言ふ。さう呼ぶのは事物を直觀的ならしめるため

4) Grundfragen. S. 218-20.

5) Grundriss. S. 4.

6) Grundfragen. S. 219.

7) Grundriss. S. 4 124.

8) Grundfragen. S. 220-21. 國民經濟の統一者が國家權力のみでないことは上述の如くであるが、シユモラーはこのことを Über einige Grundfragen des Rechts u. der Volkswirtschaft. a. a. O. S. 46-47 に明確に述べてゐる。又國民經濟と他の文化域との關係については Grundriss. S. 6 ff. に詳しい。

の類比に過ぎず、それを以て説明に置換へることは勿論出来ない。このことを理解すれば問題は從屬的なものである。而して類比が強調するのは、人間の身體に於ても國民經濟に於ても、中心機關が自覺することなくして多くの内的事象が生起する、然しだからといつて統一が、必要な場合には中心からの自覺的統制がない譯ではないといふ點にあると<sup>9)</sup>。要するに彼は國民經濟を相對的に獨立した一全體とみるのである。

## 二

次にシュモラーは國民經濟學を次の如く規定する。「國民經濟學は國民經濟現象を記述し定義し且つ原因から説明し併せて相聯關する一全體として概念する科學である」と<sup>10)</sup>。而して彼は國民經濟學は理想や當爲を主張することを斷念しなければならぬと言ふ。勿論「總ての認識の究極目的は實踐的なものである。」<sup>11)</sup>そして從來の國民經濟學は發生當初より實踐的機能を保持して來た。然しそのことは屢々科學の客觀性を攪亂した。それ故に、實踐的關心は放棄さるべきではないが、實踐をより一般的に基礎づけるために、而してその基礎たる科學の進歩のために、理想や當爲の主張は斷念されねばならぬと言ふのである。この觀點から『綱要』にはより詳しく規定して曰く。「國民經濟學は國民經濟についてその完全なる形象、時間と空間・量と歴史的結果に從つた國民經濟現象の略圖、を描かんとする。而してこのことは、それが知覺を比較し區別する思惟に服從せしめ、知覺されたもの、確實性を吟味し、正しく觀察されたものを同種性と差別性に從つて概念體系の中へ整理し、最後にかく整理されたものを典型的な規則性及び一般的因果關係の形態で概念せんとする、ことによつてなされる。かくして嚴密な科學の主要課題は(一)正しく觀察し(二)よく定義し分類し(三)典型的形態を發見し且つ因果的に説明することである。

9) Grundfragen, S. 221.

10) a. a. O. S. 223.

11) a. a. O. S. 245-46, 335-38.

る<sup>12)</sup>と。

右は大體所謂理論的國民經濟學の規定に當る。然らば彼は所謂理論經濟學と經濟史並に經濟政策の區別及びその關係を如何に考へたか。彼は原則としてかゝる區分をしない。シユモラーは、メンガーと異つて、差別の側面よりはむしろ聯關の側面に注目する。<sup>(註)</sup>然し勿論彼はこの三つを全く混同して考へてゐるのではない。後にみる如く、彼は一方に於ては歴史從つてまた經濟史に獨立の科學性を認め、他方に於てはそれを國民經濟學の補助科學として、決して理論を歴史に解消しはしない。又大體理論の方向に一般國民經濟學 (allgemeine Volkswirtschaftslehre) を、政策の方向に特殊國民經濟學 (specielle Volkswirtschaftslehre) を考へてゐる。——即ち一般國民經濟學は抽象的平均的な國民經濟を問題にし、我々の國民經濟的知識を綜合して理論的に基礎づけんとするものである。それは哲學的社會學的性質のものであつて、社會の本質及び經濟生活並に經濟行爲の一般的原理から出發し典型的な機關・施設並に運動を靜態的並に動態的に敘述する。それは我々の認識の不完全な斷片から體系的原理的に一全體を構成する。それは一般者から特殊へ進み、特殊をむしろたゞ眞理の説明のために擧げる。それは初學者には概論を與へ、學者には特殊を一般的眞理へ高めんとする試みとなる。<sup>13)</sup>反之、特殊國民經濟學は一定の時代一定の國民を具體的個別的に敘述する。それは歴史であり、實踐的行政法的である。それは一般國民經濟學並に倫理學又は社會學等の一般的眞理を参照して、個別者をその原因から説明し、又過去から將來を推論する。而してこの推論には常に指導的モチーフとして人類の進行・當該國家の運命に關する倫理的價值概念及び目的論的世界觀が入つてゐる。<sup>14)</sup>——而して彼はこの區別を以て普通ドイツに行はれてゐた國民經濟學と國民經濟政策と

12) Grundriss. S. 101.

13) かゝるものとして彼はその標題の示す如く、Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre. Erster Teil. 1900. Zweiter Teil. 1904 を書いた。

14) Grundfragen. S. 226-27.

の區別に代へんとする。乍併、彼の區分は嚴密に理論と政策とに對應するものではない。むしろ理論の方向に一般國民經濟學を、歴史と政策の方向に特殊國民經濟學を考へたと解される節がないではなく、又理論も全然政策を顧みぬものではない旨をも述べてゐる。そして方法論を説くに當つては、その方法は兩者に關係するものであり、兩者を區別して各の方法を説くのは不適當だとして、何れの論述がより多く一般國民經濟學又は特殊國民經濟學に關するかを讀者の判斷に委せてゐる。<sup>15)</sup> 要するにシュモラーは理論と歴史と政策の區別を全然無視したのではないが、それらが交渉する面により多く注目し、それらを綜合した一種の國民經濟學體系を意圖したものと解すべきであらう。

(註) カール・メンガーは理論と歴史と政策とを峻別したが、これに對してシュモラーは言つた。この區別は疑ひもなく或程度正しい。然しそれらの間には橋渡しの出來ぬ裂目はない。歴史は一般理論に準備研究を與へる。又理論國民經濟學と實踐的國民經濟學との方法論的相違は、メンガーに於けるが如く基本的なものではなくて、程度の差に過ぎず、後者もまた理論的科學に高まり得る、と。<sup>16)</sup> 更に『辭典』第三版に於てシュモラーはメンガーの區分を目して、人が實行しない提案は將來拂ひの價値なき手形だと言つてゐる。<sup>17)</sup>

尙、國民經濟は人間による自然形成物であると同時に感情をもち思惟し行爲する社會による文化形成物である。従つて國民經濟學は一方に於ては應用自然諸科學即ち工藝學・機械學・農學・林學・人間學・土俗學・氣候學・動植物分布學等と密接な關係をもち、地方に於ては精神諸科學即ち心理學・倫理學・國家學・法律學・社會學等と密接な關係をもつと述べてゐる。<sup>18)</sup>

### 三

15) Grundfragen. S. 227. Grundriss. S. 125-26.

16) „Zur Methodologie der Staats- und Sozialwissenschaften.“ Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung u. Volkswirtschaft im Deutschen Reich. Jahrg. 7. Leipzig 1882. Drittes Heft. S. 241-42, 244-46.

17) Handwörterbuch der Staatswissenschaften. heraus. v. J. Conrad u. a. 3. Aufl. 8. Bd. Jena 1911. S. 432.



さて國民經濟學の方法であるが、それは國民經濟の認識に役立つべき科學的な手續である。かゝるものとしてシユモラーが擧げるのは(一)國民經濟現象を正しく觀察し記述し、(二)それを定義し分類し、(三)原因から説明することである。<sup>10)</sup>そこで彼は先ず觀察と記述一般について述べてゐる。<sup>20)</sup>こゝではその詳細に立入るまい。而して觀察や記述の方法は國民經濟現象の相違に應じて異なる。それらの方法は或は他の科學から借られ、或は獨立に發展せしめられた。統計學の如きは後者の例である。彼はこれらの方法の詳細に立入ることを止めて、國民經濟學の補助科學としての統計學と歴史とについて述べてゐる。<sup>21)</sup>先ず統計的方法と調査を社會科學に缺けてゐる實驗に代るものとして重視し記述的國民經濟學の重要な道具だとする。歴史についてはやゝ詳しくみやう。

歴史は、シユモラーの解するところによれば、諸國民並に人類の政治的並に其他の文化的發展の全傳統を蒐集し吟味し一全體に結合するものであつて、哲學と並んで總ゆる科學の中で最も普遍的なものであり、いはゞ精神科學の中心である。而して彼は一般史とその特殊部分としての經濟史・法制史等々を分ける。後者は發展するにつれて歴史科學の單なる部分から歴史と當該科學との獨立的な中間分枝となるものであつて、歴史の課題や方法と當該科學のそれらとを結合するとされる。こゝに問題となるのは經濟史であるが、それに一種の獨立の地位を與へてゐるのは注意を要する。然し歴史は國民經濟學に對しては補助科學であつて、確實な吟味され整理された觀察材料を提供するものである。歴史の與へるこの材料は理論的命題を説明し檢證しその限界を示し、新しい眞理を歸納的に獲得するに役立つ。特に國民經濟學の複雑な部分は歴史にまつ所が多い。否それは歴史的研究の地盤の上でのみ可能である。そこでは歴史を顧ることなき抽象的議論は總て無價值である。尤も歴史が常に具體的個

18) Grundfragen.S. 224-25.

19) a. a. O. S. 246-47.

20) a. a. O. S. 248 ff.

21) a. a. O. S. 256 ff. 因にシユモラーは國民經濟に於ても實驗が全く不可能だとは考へなかつた。統計的方法と並んで歴史的方法特に比較的方法(a. a. O. S. 269)によつて實驗に代るものが得られるのみならず、國家が直接に國民經濟上の實驗を行ひ得ると考へてゐる(a. a. O. S. 296)

別的なものを敘述し、一般的なものはその域外にあるといふことが眞實だとすれば、歴史は國民經濟學にとつてさう重要なものではなからう。然し歴史は個別的なものを問題にすると同時に社會事象の一般的原因を問題にする<sup>22)</sup>。そしてそれらの原因を聯關づけることこそが正に國家學の問題なのである。而して歴史に於ては國家や國民經濟に言及されることが極めて少く、その暫定的な結論特にその價值判斷は精確な認識よりはむしろ哲學的思辨に屬し、從つて歴史に傳へられる經濟的資料の大部分は國民經濟學によつて理論的に聯關づけられることが必要である。又歴史の教へる所は我々が今日自ら見うる所よりは遙に多い。加之、我々が今日直接觀察し得るものは總て過去の傳統であり、殊に最も重要な國民經濟現象は遠き過去にその根源をもつ。從つて歴史的研究は國民經濟學にとつて不可缺のものである。乍併、歴史が國民經濟學に使用せられ得るもの、數多ある中でその一に過ぎないことは言ふまでもない。<sup>23)</sup>

(註)歴史的社會的實在を一回限りの個別的なものとして、その把握に自然科學的方法から峻別された精神科學的方法を主張するヴァインデルバント・リツケルト更にはヴェーバー等の方法論に反對し、デイルタイのそれに同感しつつ、シュモラーは書いてゐる。「國民經濟學は常に適當な場所に於て自然科學的並に精神科學的方法を適用しなければならぬ所の科學である<sup>24)</sup>」。

かくの如く彼は歴史の國民經濟學に對する重要性を強調し、歴史を國民經濟學の補助科學とする研究方法を歴史的方法と解する。<sup>24)</sup>而して注意すべきは、經濟史並に國民經濟的なものを物語る限りに於ける一般史の敘述は國民經濟理論ではなくて、その礎石に過ぎないことである。この見地から彼は舊歴史學派と新歴史學派とを區別する。「所謂舊歴史學的國民經濟學は屢々性急に一般史の成果を理論的に利用せんとした。今日我々は先ず骨の折れる經濟史的特殊研究が、歴史を國民經濟的並に社會政策的に概念し、國民經濟理論に充分經驗的な基礎工事を

22) a. a. O. S. 263-64.

23) Handwörterbuch. 3. Aufl. 8. Bd. S. 434. 467-68, Grundriss. S. 106.

24) 尙シュモラーは狹義の歴史的方法なるものについて述べてゐるが、それは史料整理のための批判的な手續であつて、國民經濟の或る部分には必要であるが、一般的にはさう重要でないとして述べてゐる (Grundfragen. S. 226)。又歴史的方法と比較的方法との關係に言及して後者は歴史的研究に固有のもので

施すべき、正しい地盤を與へるのだと考へる。そして正にその故に國民經濟學の新時代は、國民經濟學の歴史的取扱ひに對するロツシヤーやヒルデブラントの一般的希求（『辭典』第三版では傾向）からよりは、むしろ經濟史的モノグラフの時代から始るのである。<sup>25)</sup>——經濟史的研究はなほ一般的な作用をもつと彼は考へる。即ちそれは人間が必ずしも相等しいものでなく、常に相等しい典型的な經濟形態や社會制度の内に運動するものでないといふことを示した。それは國民經濟制度の歴史的發展に關する思想を齎した。それは國民經濟研究を再び慣習・法・國家・一般に文化發展の一般的原因と聯關せしめた。それは個人から出發する理論と並んで集團現象の研究が、分析と並んで綜合が必要であることを教へた。それが孤立化的抽象の成果を一全體の部分内容とし取扱ふことを教へることによつて、以前には空虚な抽象であり死んだ圖式であつたものが再び血と生命を獲得した。かくして歴史的研究は國民經濟理論並に政策の一般的基礎を變革した。就中それは實踐的實在論的感覺・現實的なもの及び可能なものに對する感覺を喚起した。この感覺は、人間が變化しなかつたが故にあらゆる大膽な進歩を不可能と考へたり、何らかの社會主義的施設が俄に全く有徳にして公平無私な人間を創造するなど、期待して馬鹿らしい將來の計畫を受容れたりは決してしないものであると。<sup>26)</sup>

（註）こゝで方法的にみたシュモラーの學史觀について一言すれば、彼は十七・八世紀に於ける重商主義者やカメラリストに實證主義的研究の端緒をみる。之に對して重農主義者やスミス・リカルド等は合理主義的方法による「國民經濟の自然論（*Naturlehre der Volkswirtschaft*）」を説いた。この合理主義的方法を繼承して社會主義が發生した。「個人主義的國民經濟學と社會主義的國民經濟學、それらは同じ母の二人の子供である。」これらの合理主義的方法に反對して十九世紀に實證主義的研究更には心理的・倫理的傾向が擡頭した。然し十九世紀の一八五〇年頃から七〇年頃までは新しい國民經濟學の陣痛時代であつた。この時代を経て、特に一八七三年に成立した『社會政策學會』の會員を中心とした新歴史學派の經濟史的特殊研究を基礎と

ないとする (a. a. O. S. 269)。

25) Grundfragen. S. 267.

26) a. a. O. S. 288e-69.

して初めて眞の國民經濟學の建設が可能となつたと主張するのである。<sup>27)</sup>

#### 四

シユモラーは觀察と記述について述べた後、定義と分類即ち國民經濟學上に於ける概念構成について論じてゐる。<sup>28)</sup>こゝではそれに觸れない。而して彼によれば觀察と記述・定義と分類は準備に過ぎない。それによつて我々が到達せんとするのは國民經濟現象の聯關の認識である。而してこの認識の理想は原因からの説明である。先ず國民經濟現象の原因とは何か。

(1)原因。現象界は我々にとつては何處にも偶然や恣意を示さず至る處充分な原因を示す一過程となつてゐる。嚴密な因果性なくして科學はあり得ない。國民經濟學にしても同様である。然し原因は必ずしも一つではない。多くの状態が結合して一定の結果を齎し、その一が缺けても結果は現れない。シユモラーは無條件に一定の結果を生起せしめる先行状態のみを原因といふ。所で國民經濟現象の原因としては、經濟生活が自然の世界を基礎としてその上に打建てられた文化の世界であるが故に、自然的なるものと心的なるものと二つがある。そして文化が高まる程心的原因が重要となる。自然的原因は機械的に作用するが、心的原因は動機づけの法則に従つて作用する。兩者は作用の仕方を異にするが、然し必然的なものであることに變りはない。先ず自然的原因については、國民經濟學は純粹並に應用自然科學を参照する、然しまた獨立に研究もしなければならぬ。この點に關して國民經濟學を自然的諸力及び自然法則的因果性の體系とみる立場があるが、それは全くの誤りといふよりはむしろ半ば眞理をもつに過ぎぬものといふべきである。次に心的原因については、國民經濟學は心理學や倫理學の

27) a. a. O. S. 243 ff. 332 ff. Grundriss. S. 81 ff. 115 ff.  
28) Grundfragen. S. 270 ff.

研究を参照しなければならぬ。その故に國民經濟學は心理學的、又は倫理的、科學と呼ばれて來た。<sup>29)</sup>然しこの點に關する從來の試みは<sup>30)</sup>まだ不充分だとしてシヌモラーは言ふ。「我々は先ず心理學的・國民經濟學的特殊研究を行ひ、次に經濟的動機論を心理學と倫理學の上に新しく形成しなければならぬ」と。又國民經濟學は社會學又は一般社會科學の一部だと言はれてゐるが、これまた同様に國民經濟學を心理學的・倫理學的・法律哲學的研究の上に基礎づけんとするものに外ならない。かう言へば、それは特殊諸科學を廢棄して普遍科學・一切社會科學の雜炊を作るものだとの非難が起るでもあらう。これに對してシヌモラーは答へる。科學は素材と方法とに従つて特殊領域へ區分され、個々の對象は孤立せしめて精確に研究されねばならぬ。然し各領域は、個別を全體の構成成分として概念し得る<sup>31)</sup>歴史哲學的又は社會學的教養によつて、互に歩寄らねばならぬ。このことは特に國民經濟學に於て必要である。國民經濟現象の心的原因は相互不可分に絡合ひ聯關をなし統一的原因をもつからである、と<sup>32)</sup>

(註)此點に關聯してシヌモラーは、國民經濟研究は個人から出發すべきか、それとも英國學者に反對して歴史學派の創始者達によつて屢々要求された如く、集團現象から出發すべきか、といふ問題に觸れてゐる。二者擇一を主張するならば、この問題は誤りである。研究が原因から出發すべきか結果からすべきかに關する一般的規則のない如く、この問題に對する一般的解答はあり得ない。一般的規則は既知のものから未知のものへ進むにある。譬へ常に先ず個々の事例が觀察されるべきであるといふことを承認するにしても、個體としての人間が常に個體としての人間であるかは問題であらう。人間なるものは諸々の人間の組織ある全體であり集團である。實際總ての個別者は詳しく觀れば無限に組成されたものであり、個々の事例は我々の分析的觀察が我々の思维過程によつては一全體と觀る所のものなのである。<sup>32)</sup>

(2)演繹的並に歸納的方法。如何にして我々は個々の原因を認識するか。それに歸納的方法と演繹的方法とがあ

29) Über einige Grundfragen des Rechts u. der Volkswirtschaft, によれば倫理學的といふのは國民經濟を慣習や法等との關係に於て把握するをいふ、心理學的といふのも同様であると。a. a. O. S. 43

30) シヌモラーは J. S. ミル、ドイツの歴史學派、フランスの社會主義、ジエウ・オンスやメンガー等の主觀價值説を考へてゐる。a. a. O. S. 280

31) a. a. O. S. 277-83, 286-87. 32) a. a. O. S. 283-84.

る。歸納的方法是個々の觀察から出發して觀察されたものを説明し、更に一群の現象について、觀察された事例については既に眞實である所のものを、眞實だと説明する所の規則レールを求める。演繹的方法是歸納的方法によつて獲得された因果關係に關する規則を使用し、その主語並に述語概念の分析から、何が當該規則に含まれてゐるか何處にそれが適合するか、如何なる事例がそれに屬するか、何をそれが説明し得るか、を明かにする。かくの如く歸納と演繹とは緊密に結合してゐる。兩者の根柢には、正しく觀察された事例について眞實であつたものは全く同じ事例の總てについて眞實でなければならぬといふ同じ信仰・理性の要求がある。又歸納の推論方法は演繹に於ける三段論法の逆に外ならぬ。のみならず歸納の進歩は演繹に利用され得る命題を齎す。兩者は兩足の歩行に對する如く、等しく科學的思惟に屬する。たゞその時々認識の狀態に應じて一方が前面に出るに過ぎない。シユモラーは抗議する、一切の演繹を排除するとの非難は論理學に通ずる者には誰にでも妥當しないと。續けて言ふ。我々が既に一切の眞理をもつてゐるとすれば、我々は演繹的方法のみを用ひるであらう。最も完成した科學は最も演繹的である。國民經濟學を殆んど完成したものと考へるスミスの亞流はそれを演繹的科學だと考へる。然し、國民經濟學の簡單な部分は別として、複雑な部分例へば社會問題の如きに於てはまだまだ歸納が必要であると。<sup>33)</sup>我々はこゝに歸納的方法を強調したシユモラーの眞意を知るのである。<sup>(註)</sup>

(註)彼は『綱要』に於て、最近のドイツ國民經濟學者は經驗的觀察を重視するが、それが屢々歸納法と呼ばれる所から、彼等は歸納的國民經濟學者と言はれる、然し彼等は決して演繹を輕視するものでなく、否彼等に於ても歸納よりもむしろ演繹が多く認められさへするのであつて、彼等はたゞ皮相な演繹に反對するに過ぎない旨を強調してゐる。<sup>34)</sup>

33) a. a. O. S. 291-94.

34) Grundriss. S. 112-12—メンガーとの論争に於ても彼は全體同じ立場に立つてゐたのである。これについては別の機會に述べるであらう。

(3) 法則。舊い國民經濟學者は種々の法則について語つた。何を法則と呼ぶかは便宜の問題であるが、それにしても彼等は法則概念を濫用した。シユモラーはかう斷定する。然し彼は決して國民經濟法則を否定する者ではない。國民經濟學に對して彼が否定するのは嚴密な意味に於ける現實的法則である。即ちそれは數量的に精密に確定された因果關係で、自然科学者の所謂精密法則である。かゝる法則は最も完成した自然科学に於ても極めて少く、その發見は劃期的のものである。かくの如き自然法則の意味に於ける國民經濟法則は勿論あり得ない。然し一定の前提殊に一定の經濟狀態が假定される限り、國民經濟に於ても因果關係の——測定可能ではないが然し精密な——確定が可能であると考へ、それを國民經濟法則時には現實的法則又は單に法則と呼ぶ。そしてかゝる法則の理論的並に實踐的價值を充分に認めるが、然しそれが飽くまでも究極の眞理でなく安定的な經濟狀態を擬制してゐることを警告するのである。次にこれに對して彼は規則性レギュラリシヒカイ即ち規則的典型的に繰返す現象系列換言すればその説明が部分的推定的にしか與へられ得ない因果關係を経験的法則と呼ぶ、經驗的とは原因研究の不完全なるをいふ。それによつて彼が考へてゐるのは統計的法則即ち統計的方法によつて確められた規則性である。而して現實的法則と經驗的法則との間には嚴密な境界はなく、後者は前者へ近づき得ると考へてゐる。<sup>35)</sup>尙彼は國民經濟的發展の研究成果たる所謂發展法則を、少くとも現在、法則と呼ぶのは不適當だとし、經驗的法則と呼ぶことを斷念する。<sup>(註)</sup>蓋し、「相似た歴史的系列の法則的發展について語ることは出来るが、然しそれ以上のものではない。」からである。そして彼はそれ以上の進歩を將來に期待する。同じことは所謂歴史的的法則即ち人間進歩の一般的定式についても言はれる。<sup>36)</sup>

35) Grundfragen. S. 291-305. Handwörterbuch. 3. Aufl. 8. Bd. S. 484-86.

36) Grundfragen. S. 306-7. Handwörterbuch. 3. Aufl. 8. Bd. S. 488 ff.

(註) シュモラーの法則概念には若干の變遷がある。『基礎問題』に於ては所謂發展法則のあるものを經驗的法則に入れるものと如くである。『綱要』に於ては國民經濟法則をも統計的法則と共に經驗的法則とし、現實的法則を自然科學的精密法則に限つてゐる。<sup>37)</sup> 經驗的法則を統計的法則に限つたのは『辭典』第三版に於てである。なほそこで彼は新カント派の精神科學に於ける法則否定の傾向を行過ぎたものとして、これに反對してゐる。<sup>38)</sup>

## 五

以上觀察から出發して法則にまで到達する分析的研究の外に、シュモラーは、目的論的觀察や倫理的價值判斷による綜合的研究もまた國民經濟學にとつて必要であると考へる。<sup>39)</sup> 然し目的論的觀察や倫理的價值判斷は主觀的な側面をもつ。でそれらは分析的研究によつて補はねばならない。分析的悟性は歸納と演繹によつて原因を認識する。この認識はその方法さへ正しければ誰にでも同一である。かゝる認識を基礎とすることによつて世界觀や理想は確立され行爲や將來の洞察は正しくなる。かくて分析と綜合は結合されねばならぬ。それが國民經濟學の進んで來た道であり、進み行くべき道である、と。<sup>40)</sup>

(註) 彼は『辭典』第三版には目的論的觀察と倫理的價值判斷に特別の一章をさいてゐる。科學に於て目的論的觀察が避けられねばならぬことは勿論である。然し人間の認識は有限である。自然科學、特に生物學等の如き、に於ても目的論的要素は除去し盡くされない。精神科學に於ては一層さうであつて、全體が考察される場合にはそれが許されるのみならず、またそれが研究の主要對象でもある。又認識は總て結局に於て實踐的なものであつて、理想や當爲の總てを國民經濟學から除去すべきではなく、國民經濟學にとつても倫理的價值判斷は必要である。而して價值判斷は單に主觀的なものではなくて客觀的なものもある。かう言つて彼はマックス・ヴェーバー等の沒價值性理論に反對してゐる。<sup>41)</sup>

最後に、シュモラーは方法さへ正しければ結果は誰にでも同一である旨を屢々述べてゐるが、それについて興

37) Grundriss. S. 110 ff.

38) Handwörterbuch. 3. Aufl. 8. Bd. S. 486-87.

39) Grundfragen. S. 307-8 Wechselnde Theorien etc. a. a. O. S. 321-24.

40) Handwörterbuch. 3. Aufl. 8. Bd. S. 490 ff.



味があるのは、ベルリン大學總長就任演舌である。言ふ所は凡そかうである。一切の研究は、少くとも一定の限界内に於て、研究者が完全な眞理を發見し得るといふ前提から出發する。完全な眞理の規準は、總ての研究者が同一の結果に到達し、萬人がそれを眞理と認めることである。萬人に眞理と認められる知識の體系のみが完全な科學 (Wissenschaft) である。これに對して一部の人のみが認めるに過ぎぬものは學說 (Theorie) と呼ばれる。今日なほ多くの學科に於て學說の鬭争が続けられてゐるが、それは完全な科學の生成過程である。而して不完全な知識は不完全な方法に由來する。従つてそれは正しい方法がとられるにつれて完全になる。事實最近著しい對立の反面に萬人に承認される知識は増大した。然し事象は複雑であり、經驗的知識の缺陷は主觀的な推測によつて補へなければならぬ。そこにまた學說對立の根據がある。總じて異つた體系の基礎には異つた世界觀がある。而して各々の立場がとる世界觀の高低及び知識の廣狹深淺によつて學說には高低の區別がある。それを審判するのは科學及び實際生活の其後の發展である。従つて相異つた立場が並存し争ふ限り、それらに平等な活動の機會が與へられねばならぬ。但しそれは彼等の確信が全體利益に對する崇高な見解に基き、階級利益や野心に基づかない限りに於てである。——これを規準として彼は所謂大學に於ける學問の自由に關する主張を判定してゐる、

——死滅しつゝある老朽した傾向をより高くより完成された傾向と同列に置くことは進歩と發展の阻止を意味する。即ち嚴密な意味に於けるスミス主義者もマルクス主義者も今日充分價值あるものと考へられることを要求することは出来ない。今日の研究・教養・方法の地盤に立たぬ者は有用な教師ではない。アカデミーの教師は全體利益を導きの星としなければならぬ。階級利益の代辦者であつてはならない。かういへば、反對者は、それは餘り

にも労働者階級に友好的である。まさにそのことによつて全體利益ではなくて階級利益の立場に立つものと非難するでもあらう。勿論今日支配的な國民經濟學は労働者階級に友好的な傾向を示してゐる。然しそれが正義と全體利益に一致しないかどうかは全く別の問題である。かく非難されるアカデミーの教師は總て有産にして教養ある階級に屬する。然し彼等は彼等を攻撃する代議士等の様に自己の階級利益を擁護する者ではない。法制上保證された教師の獨立的地位は彼等をして上下左右に對して獨立を感じしめ得る。而して等彼の判斷には労働者階級に對する同情の念が入りこんでゐるかも知れないが、それは當代の政治的社會的傾向と一致するものなのである。その社會改革の立場は一面的な労働者階級の利益の立場でもなく、資本家階級の利益のそれでもない。我々の立場は、現存するものゝ反動的保持や空想的革新とは異つて、國家の倫理的義務を信じ、ドイツを從來の如く進歩せしめる諸改革を探究し基礎づけんとするものである。この根本的傾向に於ては、——シュモラーは結論する——個々の點は別として、もはや對立はないのである、と。<sup>41)</sup>

以上シュモラーの國民經濟學方法論を概説した。それについて問題になる主な點を覺書風に指摘しておきたい。先ず國民經濟を一の全體とみたのは一應正しいが、獨立的な個別經濟に媒介される側面を輕視して全體の側面のみを強調するのは一面的である。又國民經濟を世界經濟との聯關に於て捉へてゐないが、國民經濟の成立は同時に實在的な世界經濟の成立であつて、世界經濟に媒介されない國民經濟などいふものは何處にも存在しない。次に國民經濟學を國民經濟現象の因果的説明の科學とするが、經濟現象は因果的説明を以て盡されるか。因果的説明の困難は單に諸原因の共存といふ所にだけではなくて、より多く因果が交錯する所にある。従つてそれを把握するためには因果的研究から出發しなければならぬが、而もそれを超えねばならぬ。國民經濟學は單なる因果的説明の學ではあり得ないし又あつてはならぬ。その故に彼は分析的研究の外に綜合的研究の必要を感じた譯なのであらうが、それが國民經濟學時に理論的國民經濟學の方法として如何に貫徹すべきかは必ずしも明確ではない。所謂原因・法則及び歸納と演繹についてもこの點から考へ直すことが必要であらう。又同じ觀點から彼は理論と歴史と政策の悟性的區別よりはむしろそ

41) „Wechselnde Theorien und feststehende Wahrheiten in Gebiete der Staats- und Socialwissenschaften und die heutige deutsche Volkswirtschaftslehre“ 1897. Grundfragen. S. 318-19, 228-43.

これらの聯關に注目し、その綜合を意圖したかにみえるが、そしてそれは評價さるべきものをもつが、然しそれは全く直接的無媒介的なものであつた。一般國民經濟學と特殊國民經濟學の區別の如きも概念的に整つたものとは考へられない。多くの點に於て彼は綜合的立場に立たんとしてゐる。然しそれは對立する諸契機を寄集めたに過ぎないかの觀がある。彼は論理學に通ずると言つたが辨證法的論理學には全く不案内であつた様である。最後に、彼の方法論を彼の研究態度に即してみれば、理論の歴史的基礎を強調し、經濟史の研究に沈潜したのは彼の最大の學問的功績であつたが、その反面理論的研究を等閑にしたことは争はれない。成程方法論上は理論的研究を輕視しはしなかつた。然し方法論とその運用とは別である。新しい理論の建設や法則の發見の如きは論外とするも、發展法則や歴史的法則の否定の如きは方法論的誤謬と理論的脆弱性の端的な表現だと言はねばならない。又社會問題に對して多大の關心を示し、その解決に努力した點に彼はまたその眞面目を發揮したのであつたが、そして社會政策を基礎づけるために經濟學と倫理學等々との結合を意圖し、理論と政策の融合を狙ひさへしたのであつたが、そのことはまた理論的研究の不徹底を誘致することゝなつた。

これら諸問題の詳細な吟味はなほ一連の學史的考察を媒介にして行はれなければならない。こゝではたゞ次のことだけを言つておきたい。即ち以上の難點は要するに、彼の市民的立場・即ち産業資本の基礎を確立したドイツ資本主義がその獨占段階に到達する過程に於ける市民的民族國家の立場の抽象性に由來すると。ドイツに於ける産業資本主義は大體普佛戰爭（一八七〇—七一年）の頃に確立され、同時に（一八七一年）プロシヤを中心とする近代統一國家が完成した。これによつて産業資本の確立と近代國家統一を主張した舊歴史學派の使命は達成されたのである。産業資本主義は獨占段階に向つて進行する。所でこの進行は、既に産業資本の確立過程に於て激成せしめられてゐた所の諸々の社會問題を擴大再生産する。それにつれて勞働運動は益々脅威的となつて行つた。そこで、一方に於ては産業資本の獨占資本への發展助成のための國家活動、他方に於ては社會問題を出來るだけ緩和して資本の發展を圓滑にするための國家活動の基礎づけが、今や國民經濟學者の課題となつたのである。シユモラーは一八七〇年以降を以て新歴史學派の時代としたが、その眞實の意味はこゝにあつた。即ち舊歴史學派の新歴史學派への進展は産業資本の獨占資本への發展過程に照應し、それを現實的地弊とするといへやう。この地弊に立つてシユモラーは歴史學派の傳統を繼ぎ、超階級的全體利益を強調して、講壇社會主義等々の名に於て個人主義と社會主義とに抗爭したのである。そこには評價さるべき所謂全體主義の一面がないではない。然しそれがあくまで市民的國家の立場であつた所に批判さるべき歴史的限界がある。そしてこの限界こそが彼の方法論に於ける抽象性の基根をなすものである。